

住民の意識から見る山村集落の現状と将来

—飯山市小菅集落調査報告 第一報 (3)

中原 洪二郎

(信州大学人文学部)

問 題

小菅集落（飯山市瑞穂）は山腹の急な斜面に沿って東西に形成された集落である。集落の中心軸ともいえる一本の道路の両側に住居、道路、水路が展開し、ちょうど木の葉のような形になっている。集落内の高低差が大きいと同時に、隣接するどの集落よりも高い位置にあり、飯山市の市街部からの高低差は約180メートルである。この集落の地理的位置関係が、集落住民の生活行動に大きな影響を与えていることは想像に難くない。例えば日常的な食品雑貨を取り扱う店舗が集落内に存在しないため、仮に最寄りの店舗であれば1,300メートルほど離れた隣接集落へ買い物に出かけることになるのだが、その程度の距離であったとしても自動車を使用しない場合、移動にかなりの困難を伴う。特に冬場は積雪と路面の凍結によって移動がますます難しくなってしまう。自家用車を



図1 小菅集落中心部から山頂方面

所有し、またそれを運転する人がいる世帯はまだよいが、高齢の単身世帯などでは移動手段がきわめて限定的になってしまうため、生活に必要な物品の入手については世帯外からの生活支援に頼らざるを得ない。例えば飯山市が運行している「コミュニティバス」の利用があげられる。このバスは小菅集落と飯山駅の間を週2回、上下各1便ずつ運行されており、途中の停留所には公民館、スーパーマーケット、病院などがある。運賃は小菅集落と飯山駅間で片道500円、小菅集落とスーパーマーケット¹⁾間で片道300

円、小学生は半額、未就学児童は無料となっているが、高齢者向けの割引は設定されていない。ただし規定の要介護認定を受けている場合には、平均すると1ヶ月あたり4回分の「福祉タクシー」を利用することができる。

交通の問題と相まって重要なのが、積雪と除雪の問題である。飯山市は長野県の北部に位置し、平地での平均積雪量が約140センチメートルである。上述の通り小菅集落は山腹に張り付くような形で存在しているため、積雪の影響は平地部に比べてかなり大きいといえる。集落内の道路と、集落と市街地を結ぶ幹線道路の除雪が速やかに行われることが住民の生活を守る上で重要である。除雪については交通の確保とは別に、各世帯の雪下ろしと雪の処分方法に関する問題が考えられる。高齢化・単身化・過疎化が同時に進行する農村集落の場合、各世帯の雪下ろしをどのように行うかということは、安全上きわめて重要な問題であるといえるだろう。さらに、除雪した結果としての

¹⁾ 前述の最寄り店舗ではない

雪をどのように処理するか、という問題が発生する。道路の除雪については沿線住民の敷地に除雪された雪が侵入する可能性があり、またその他の場合でも所有地に取まり切らなくなった雪をめぐる住民間のトラブルというものも可能性としては考えられる。このように除雪については住民個人あるいは単一の世帯としてどのように行われているかということのみならず、集落コミュニティとしてどう考えられているか、ということが重要であろう。

コミュニティとしての問題は、高齢化・単身化・過疎化の進行に伴って、様々な側面に暗い影を落としている。これまでコミュニティが維持してきた作業の共有や文化的営みの維持の困難性も強めることになるだろう。例えば集落にはいろいろな業務を担当する役職があるが、これらの業務をどのように分担、負担するかという問題や、集落内に点在する文化財の維持・管理の費用負担、祭りの実施と継承に伴う負担など、考えられる問題は少なくない。

本稿ではこれらの「交通」「雪」「コミュニティ」の問題を中心にして、小菅集落の現状と将来について、世帯主の問題認知状況と意識を通して分析し、調査速報としての基礎的な報告を行う。

方 法

信州大学社会学研究室は、2002年度より飯山市をフィールドとして集落調査を行ってきたが、2003年には小菅集落を対象として、全世帯69戸を対象として聞き取り調査を実施した。(なお、当初の対象世帯名簿は70戸であったが、調査の過程で1戸は他の世帯と同一世帯であると判断したので69戸となった)。調査期間は2003年11月7日～9日であった。対象世帯にはあらかじめ調査依頼を郵送および電話にて行い、事前に電話で連絡がとれなかった世帯については調査期間中に直接訪問して依頼した。調査対象69戸のうち、移転・病気・不在などによる調査不能が6戸、調査拒否が4戸となり、最終的な有効戸数は59戸(計画対象者数69戸に対して85.5%、有効対象者数63戸に対して93.4%)であった。調査員(人文学部で社会学を専攻している学生)が対象世帯を訪問し、調査票に基づく構造化された形式の質問と、関連する自由な回答を記録する、他記式半構造化面接法を用いた。

分 析

集落の現状

図2は生活環境に関する5項目についての評価をまとめたものである。「自然環境」「交通や買い物などの社会的な生活条件」「集落の活動や近所づきあい」「行政サービス」「福祉・医療サービス」のそれぞれについて、「全くよくない」「それほどよくない」「普通」「まあよい」「非常によくない」の5件尺度で測定された。もっとも高い評価を得たのは「自然環境」であり、「近隣関係」がそれに続いている。「自然環境」と「近隣関係」以外の項目についてはおおむね「普通」を頂点にして「よい」と「悪い」の両方に評価が分かれており、とくに「生活条件」は「よい」「悪い」の評価がはっきりと割れている。

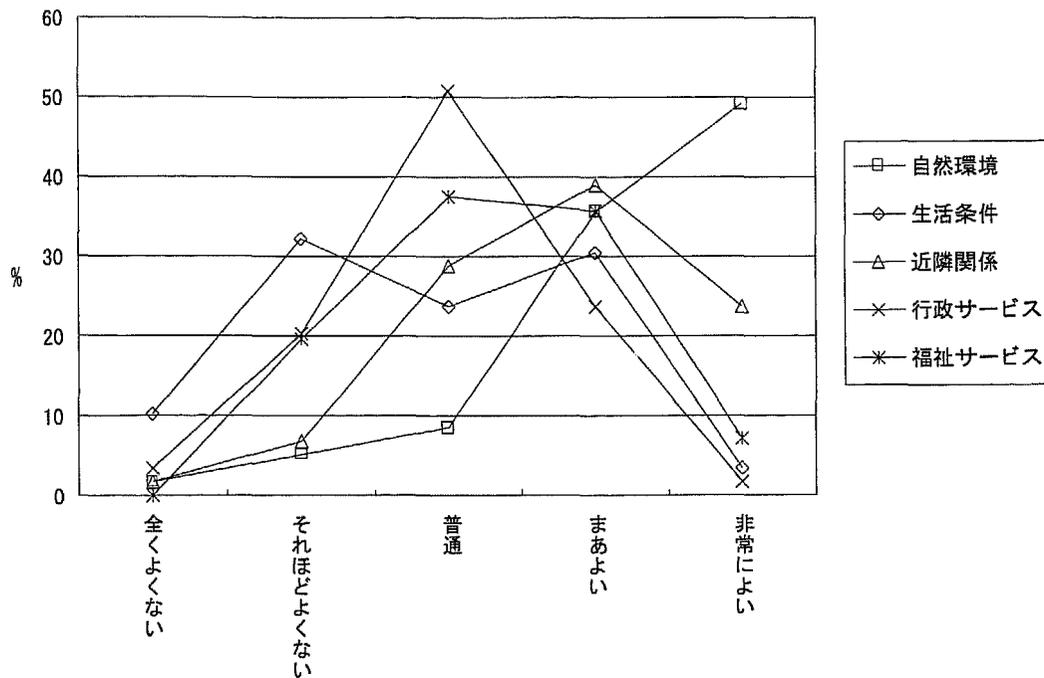


図2 生活場所としての集落の評価

小菅集落は前述の通り、山腹に張り付くように発達した集落である。集落東側には小菅神社の奥社へと続く深い森、北部には北竜湖、南部には南竜池と、豊かな自然に恵まれた土地である。また水資源にも恵まれており、集落には山の湧水による水路が縦横に引かれている。「自然環境」の高い評価は、生活条件の厳しさとある意味で表裏一体となるものではあるが、それでもなおこの豊かな自然は、小菅集落の住民にとってアイデンティティと言えるものであるのだろう。

「交通や買い物などの社会的な生活条件」についての評価が割れている理由については、各世帯が利用可能な生活資源の影響が考えられる。例えば世帯員が自動車を所有している世帯では、比較的生活条件を肯定的に評価するのに対して、高齢単身世帯では否定的な評価になる、といったことが想定できるが、分析の結果、少なくとも年齢および世帯構成との関連は、交互作用も含めて認められなかった²⁾。年齢や世帯構成といった属性以外の生活資源の差、例えば収入や外部資源の利用可能性などが評価の差に影響していると考えられるが、それがどのようなものであるのかについてはさらなるデータの収集が必要である。

生活環境の評価に加えて、生活をしていく上で具体的に不便なことや困ることについて自由に回答してもらった結果を、「金銭に関すること」「健康に関すること」「一人暮らしに関すること」「交通に関すること」「雪に関すること」「行政に関すること」「高齢化に関すること」「村の役職に関すること」の8カテゴリーに分類した結果が図3である。

²⁾ 観測度数が小さいため、年齢や世帯構成でさらに対象者を層化する分析には精度の点で問題がある。

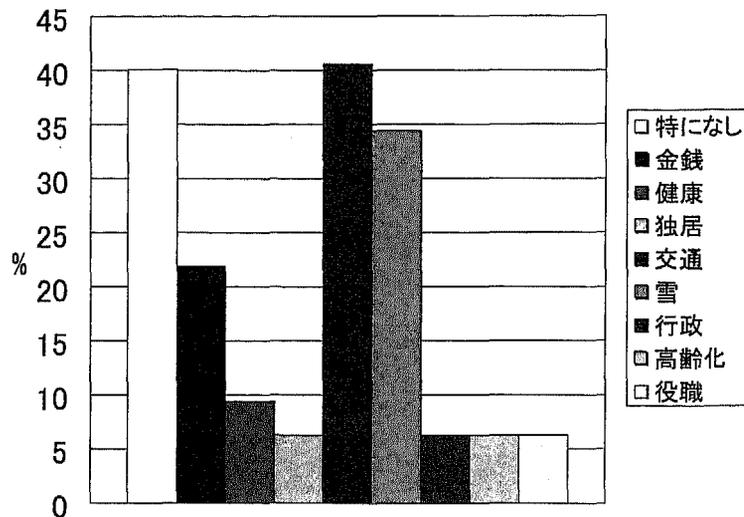


図3 現在感じている生活上の不便や困難

「交通」と「雪」に関する不便、困難を訴える回答が多く、次に「金銭」に関する困難が続いている。この結果は上述の生活環境の評価と一致しており、小菅集落の地理的条件を強く反映したものだと考えられる。「交通」に関する回答の具体的内容としては「交通の便が悪い」という一般的问题の指摘がほとんどだが、「コミュニティバス以外の交通手段がない」「バス停までの坂道を移動するのが大変」「高齢者の移動が困難」といった具体的指摘もある。「雪」に関する回答の具体的内容としては「冬場の交通」など、交通と結びついた回答が少なくない。そこで次に降雪と除雪について、各世帯がどのように行っているかと、その問題点について確認してみる。

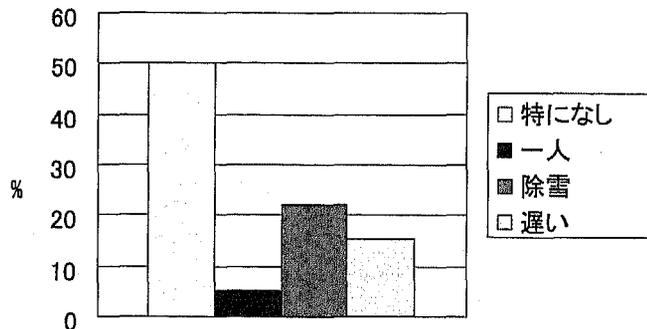


図4 除雪の問題点

敷地内の除雪についてはほとんどの対象者が、世帯主本人か家族が消雪パイプや手作業などで行っている。場合によっては近所同士で作業を共有したり、業者に依頼して行ったりしているが、その頻度は多くないようである。道路部分の除雪は基本的に行政が行っている。除雪に関わる問題点としては50%の世帯が特に問題を感じていないと回答しており、22%の世帯が「雪の捨て場所がない」こと、16%の世帯が「市の除雪作業の開始時間が遅く、作業が雑である」という問題点を指摘している（図4）。「雪の捨て場所がない」ことに関する回答の具体的内容としては、「敷地内の雪置き場がすぐにいっぱいになってしまう」「住居が隣接しているところでは雪を置く場所がない」「敷地内に雪を置くと、外へ出るのが困難」「道路から除雪された雪が敷地に放置されてしまう」などが挙げられている。「市の除雪作業」に関する回答の具体的内容としては「除雪の開始時間が午

前8時前後からであるため、それが終わるまでは出かけられない」といった指摘が比較的多かった。「作業が雑である」という点については、「現状の体制ではもはや処理能力を超えてしまっているのではないか」という指摘が少なくない。

さて、ここまでは集落の現状とその問題点について簡単な分析を行ってきたが、次に集落の将来像に関する住民の意識を明らかにしていく。

集落の将来

家の将来や集落の将来に関する不安について自由に回答してもらった結果を、「高齢化・過疎化・少子化」「家の後継者が居ない」「農業軽視」「文化財保護」の5カテゴリー（複数回答）にまとめたものが図5である。「高齢化・過疎化・少子化」についての不安が75%と多く、ついで「家の後継者が居ない」が43%となっている。また1960年当時、100戸461人だった人口は、2000年には74戸206人まで減少している³⁾。この結果を見ても、集落の「存亡」という点に関する住民の危機感強いといえるだろう。世帯主の平均年齢は約65歳、世帯構成員全員の平均年齢は約57歳と高齢化が進んでいることがわかる。集落を維持するためには若い世代の流出を防ぎ、旧住民のUターンと新住民の移入を進めるしかないが、そのためには飯山市付近に就業可能な産業が存在することだけでなく、居住地として小菅を選ぶためのインセンティブが必要である。そうでなければ交通の便の悪さと雪の問題を抱える小菅集落が敢えて選ばれることは難しいだろう。では住民は小菅集落について、どのような「魅力」を感じているだろうか。

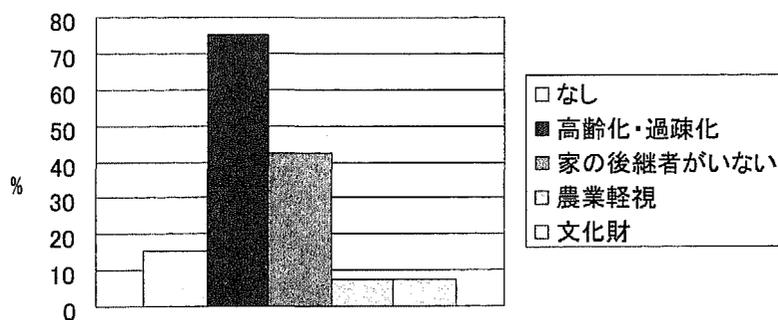


図5 将来の不安

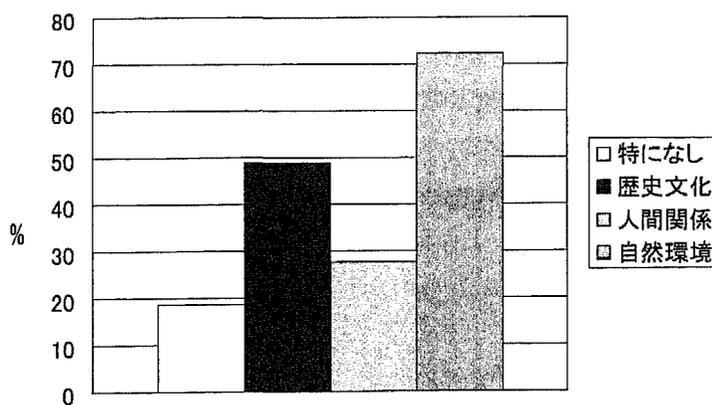


図6 小菅のよいところ

³⁾ 国勢調査による。

小菅集落のよいところ、自慢できるところについて自由に回答してもらった結果を「歴史文化」「人間関係」「自然環境」の3カテゴリー（複数回答）にまとめたものが図6である。自然環境に関する評価が高く、生活環境に関する評価と一致した結果となっている。魅力的な「自然環境」は、その他の生活上の条件が充足して初めて居住地選択のインセンティブとなる。魅力としての「歴史文化」については、小菅神社を中心とした集落の歴史を反映した結果だろう。小菅は平安時代より栄えた修験道の聖地であり、集落の内外に数多くの文化財が残されている。また3年毎に大祭が行われて衆目を集めると同時に、制度としての集落を維持する機能を果たしている⁴⁾。しかし「歴史文化」も「自然環境」と同様、観光資源としての可能性は有しているものの、集落を維持するためのインセンティブとしてはやや弱いだらう。先に述べたような「就業可能な産業」として、これらの潜在的な観光資源が活かされるようになれば、「歴史文化」や「自然環境」も居住地選択のインセンティブに転じる可能性は残されている。

残しておきたい小菅独自の伝統に関する質問では、「なし」が9世帯あった他はすべての対象者が「祭り」「神社」「文化財」のいずれかを挙げている。この点から見ても小菅集落の集落としてのアイデンティティは、農業や産業ではなく、自然と歴史という点に置かれていることが明らかである。このことは、集落内かその近くに作ってもらいたい施設や設備についての質問に対する回答からも読み取れる。自由に回答してもらった結果を「福祉医療施設」「運動場などスポーツ関連施設」「バス停・道路など交通関連施設」「資料館・展示館など文化関連施設」「スーパーマーケットなど買い物関連施設」「その他の施設」の6カテゴリー（複数回答）にまとめた結果が図7である。

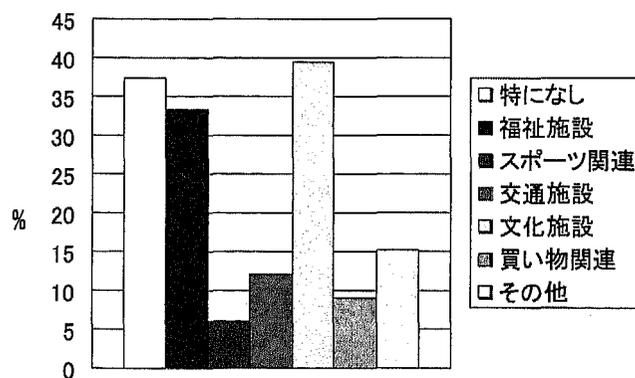


図7 要望施設

「文化施設」と「福祉施設」の要望が際だって強く、その他の施設はほぼ横並びとなっている。ここでの「文化施設」とは、資料館や展示館など、小菅の文化財を保護、展示するための施設を意味している。また「福祉施設」とは、病院など医療施設と、老人ホームや介護センターなど、高齢者福祉に関する施設を意味している。集落のアイデンティティとしての「歴史」を重視する結果として、「文化施設」が望まれているという状況や、高齢化が進む集落の現状を反映して「福祉施設」が望まれているという状況は、これまでの分析結果から見ても一貫したものであると言えるが、現状

⁴⁾ 祭りや集落の役職にはコミュニティの維持機能がある、という立場とは別に、祭りの維持や役職への就任などに必要なコストが大きすぎることで、若者が集落を離れていく一つの要因となっているのではないかと、という対象者からの指摘もあった。集落の維持のための役務について費用負担意識については、今後も検討していくべきであろう。

として最大の問題であると認識されている「交通」と「雪」に関する施設がそれほど望まれていないのは意外といわざるを得ない。生活上の不便や困難に関する回答と、要望施設との間に関連があるかどうかをクロス集計表によって分析⁵⁾してみたところ、若干の関連が認められた「不便困難：雪」「施設：買い物」以外については、統計上の関連は認められなかった。「施設」という質問の形式が「交通」と「雪」に関する回答を引き出しにくかった、ということも考えられるが、現在の集落が抱えている問題を施設の誘致・整備によって改善していくという発想にはつながっていない可能性がある。

結 論

まず、交通と雪の問題が、集落が現状で抱える問題として認識されていることが明らかになった。また、高齢化・過疎化・少子化に対する不安感も強く、集落の「存亡の危機」が強く意識されていることがわかった。集落の肯定的特徴として豊かな自然と歴史、文化が広く意識されており、集落の将来像としてもこれらを活かす方向性が望まれていることが示唆される結果となっている。

小菅を集落として維持するためには、住民の存在が不可欠なのは言うまでもない。そのためには通勤圏に就業可能な産業が必要である。しかし仮にそのような条件が整ったとしても、小菅集落が居住地として選択されるためには、選択されるためのインセンティブが必要である。そもそも「交通」と「雪」の点で小菅は不利な状況に置かれているため、まずこの状況を改善することが大前提である。現在進められている幅5.5メートルのアクセス道路⁶⁾の完成によって、「交通」の問題がどれだけ解消されるかが注目される場所である。

雪の問題については、市による道路除雪の問題と、除雪後の雪をどのように処理するかという問題を解決しなければならない。道路除雪については上述のアクセス道路完成の影響を受ける可能性があり、状況を見極める必要があるだろう。除雪後の雪の問題は、集落内の地理的位置関係などによって問題の程度が世帯によって異なっていることに注意すべきである。このようなケースが集落コミュニティにおける紛争の火種ともなりかねないが、逆に雪の問題をうまく解決することによって、団結力を強化することが出来るだろう。

集落の「自然環境」と「歴史文化」を観光資源として開発し、これを集落の主要な産業として定着させ、職住一体によって集落の維持を図るという方向性は、「観光による村おこし」として一般的な方略であるが、問題点も多い。まず産業として確立可能なほどの集客効果が望めるか、という点が最大の問題である。また観光資源開発によってどれほどの雇用が発生するか、という問題もある。さらに、仮に観光資源開発に成功し、小菅が「観光地」として再出発を果たしたとしても、それにもなってもコミュニティとしての「集落」が消失してしまえば意味がない。

このように考えると、「観光」を産業の主体とするのではなく、より堅牢・堅実な産業基盤を確立することは不可欠である。その上で、「自然環境」や「歴史文化」が集落の産業基盤を補完し、また人的交流など活性化の動因となり、さらに居住地選択のインセンティブとなるような将来設計

⁵⁾ クロス集計表などによる対象の分割は、元々の対象者数が少ないため、統計上の問題を伴っている。そのため、2変数間の関連の有無について統計的な検討は困難であり、そのような分析に基づく解釈については不正確なものにならざるを得ない。

⁶⁾ 平成15年度緊急地方道路整備（過疎代行）工事による。

が重要なのではないだろうか。産業基盤の確立は飯山市全域にわたって共通の問題であり、集落単独で策を練るには難しい問題も多い。また何か新しいことを始めようとしても、その労力・費用をいかに負担していくか、という問題が立ちふさがる。しかし森・水・雪・傾斜地といった自然の特色や、製炭・製紙といった一度は衰退したものの現在は付加価値が高くなっている小菅の伝統的産品など、小菅集落としての特徴を活かした産業基盤の確立がもし可能であれば、それに勝ることはないだろう。

小菅集落の状況は、地場産業の衰退、離農、高齢化と過疎化の進行といった日本の山村集落が抱える様々な問題と共通の構造に基づいており、決して特異なものではない。集落の将来は住民の不安感に示されているように決して安泰とは言えない。しかしそのような悲観的要素が存在すると同時に、小菅集落の住民は集落のアイデンティティとして豊かな自然環境と特徴ある歴史・文化を明確に意識しており、そこに活路を見いだす可能性を秘めている。小菅集落の将来像に関する分析・検討・提案は今後の研究報告で引き続き行っていきたい。